

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2009年9月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.31 「卒業生＝宣伝マン？」

9月に入り、塾業界は「ほっと一息」といったところでしょうか。3ヵ月後、12月になると冬期講習の準備が始まり、入試、新学期生募集…あつと言う間に最多忙期に突入します。

ぜひ、今のうちに来年度の戦略構築を進めて下さい。この時期を逃すと日々の業務に忙殺され、結局、何の変化もできないといった状態になってしまいます。

過日、ある方にチケットをプレゼントされ、アリスのコンサートへ女房殿と出掛けました。青春時代を懐かしむ老老男女?の方々にいっぱいでした。私も学生時代にアマチュアバンドを組んでいて、学祭等でアリスの楽曲を何度も演奏したことがあり、当時を振り返る幸せなひと時を過ごすことができました。

こうしたコンサートにはたまに出掛けるのですが、いつも大きな学びを得ることが出来ます。塾教師の仕事は「教えること」だけではありません。もし、教えることだけを仕事にしたいのであれば学校の先生(公務員)になるしかありません。彼らは40人を前に教えても、離島の分校で2人を前に教えても収入は変わりません。なぜなら、目の前の生徒数にかかわらず教えることは同じであり、彼らは正に「教えること」を仕事としているからです。

塾の場合、40人が2人になったら…収入どころか塾そのものが潰れてしまいます。塾教師にとって「教えること」は仕事の一部なのです。少なくとも、子供たちに「この先生の授業を次も受けたい」と思わせる授業を展開しなければならないのです。

復活アリスのコンサートでは、熱心なファンにとって目新しい楽曲はありません。しかし、それでも多くのリピーターが存在します。その理由は何でしょうか？

一言で言うと、帰属意識です。

「アリスのファン」としての居所が「そこ」にあるのでしょう。そして、アリスのメンバーも十分にそれを意識したパフォーマンスを展開します。そうしたエンターテインメントは我々塾人も大いに学ぶ必要があります。

さて、あなたの塾に通う生徒達は、「あなたの塾に通っていること」に誇りを持っているのでしょうか。以前もお話したことがあるのですが、居酒屋等でバイトしている大学生に出会うと「中学生時代に通っていた塾」を尋ねることがあります。その時、堂々と「〇〇塾です」と名前が出てくる塾は確実に生徒を集めている塾です。反面、「いえ、小さな近所の塾ですから…」と言葉を濁してしまう塾は…。

塾名を言うことをためらう卒業生が、塾の評判を広げてくれることはありません。堂々と、「〇〇塾です。あそこの△△先生には本当にお世話になりました。素晴らしい先生です。」と言ってもらえるようにしなければならないのです。「卒業生の結婚式に塾長が招待される塾」は、絶対に潰れない塾でしょう。中小・個人塾にとって、そうした帰属意識の高い塾を作り上げることは大きな課題です。

では、どうすれば帰属意識の高い塾を作ることができるか…。

もちろん、生徒一人ひとりに寄り添う親身な指導によって人間関係を築くという本質論は当然として、それを維持・継続させる戦略が必要です。帰属意識を高めるためには、帰属機会を増やすことです。具体的に言うと、せめて年に1度の同窓会を開くことです。人は、そうした機会に参加することで倒れていたアンテナ(意識)を立てるようになります。最終的にアンテナが立ちっぱなしの状態にまでさせることができれば、その卒業生と保護者は地域の応援団として、「あなたの塾」を支え続けてくれることでしょう。

アリスのコンサートは、正に同窓会の趣でした。ビジネスの格言に「未来は売れないが過去は売れる」という言葉があります。卒業生に対して「あなたの塾で過ごした3年」を忘れさせない(常に思い出させる)戦略を是非講じて下さい。

その第一歩は、目の前の現役生に「忘れられない授業」を提供するところにあることは言うまでもありません。10年後の同窓会で「先生、金星の満ち欠けを説明するために、バスケットボールを抱えて教室中を走り回っていたよね」と話題になるような…。

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2009年9月25日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouku.co.jp/>

業界
TOPICS

vol.06 危機管理の極意「人材の確保と適正価格について」

景気悪化が続く中、政権交代が実現しましたが、民主党の幹部は元々は自民党にいた人たち・・・本当に改革が実行され国民の生活が改善されるのか大注目です。民主党の政策で「子育て支援(毎月2万円以上)」「高校の実質無料化」などにより、教育業界がどのような影響を受けるかも懸念されています。

しかし、いずれにしても生き残るためには有能な人材の確保が最優先されなければならないし、月謝についても真剣に見直しをする必要がありそうです。

そこで、全国の主要塾の人材確保と適正価格についての考えについてまとめてみました。(今回は、統一して塾名は匿名とさせていただきます)

有能な人材確保は教育の生命線

A塾

「以前より応募は増えたが、塾向きの有能な学生は減っていると感ずる。やはり卒塾生の中から情熱を持って指導したいという人を採用し、育成して活躍してもらうのが一番。クラス指導のチューターとして、個別指導の講師として、できるだけ多くの卒塾生に来てもらえるようにする」

B塾

「月謝は安いで指導力が高く、生徒が集まっているので各校舎の採算ラインは安定しており、県内でもトップクラスの人気企業となっている。年々応募が増え、辞める人も少ない。福利厚生だけでなく、トップの意識として『負けない努力』言い換えれば『勝ちぐせ』を維持していくしかないと思っている」

C塾

「有能な人材は塾の生命線であり、国や地方の将来を担う人材育成のため、自分自身と戦う人に来て欲しい。積極的に大学にも足を運んで塾をPRするとともに、父親の代からの卒塾生にも声をかけ、できるだけ交流を深める機会やアルバイトの機会

を増やしている」

価格破壊ではなく適正価格で市場変化が起こる

D塾

「単なる価格破壊だと割引合戦でしかないが、うちがやっているのは適正価格で最高の指導を市場に提供すること。これで負けるわけがない。既存の考えに囚われて高額月謝のままだと生徒はいなくなるだろう」

E塾

「ブランド力が定着し指導力への信頼も得られたので、以前のような割引や無料は、新校舎の無料体験授業を除いて辞める方向だ。市場からは『より安定した形で長期間塾に通わせたい』という強い意識を感じており、一番に選択される塾になるための努力をしたい。チラシ作りや校門配布を全員でやるなど、社内の意識改革も行えば、前年比で少しでもプラスになり、それがもの凄い自信につながると思う」

F塾

「生徒の親は、単に価格の安さを塾に求めているのではなく、どれだけ生徒に親身になってくれる先生がいるかを見ている。だから、初心に戻り泥臭く、丁寧に生徒の目線で指導したい。その結果として地域一番の塾として生き残ることができると思っている」

ただし、採用と育成の責任は常に経営者の側に問われます。有能な社員や講師で揃えていると思っても、意外な落とし穴もありますから、毅然とした人材管理も不可欠です。生徒を褒めてやる気にさせるのと同様、期待を持って生き生きとスタッフに働いてもらえる職場づくりにも努力しなければなりません。

< 新しき村の失敗 >

生臭いエゴイズムの村

武者小路実篤（むしゃのこうじ・さるあつ）が、1918年、宮崎県児湯郡木城に建設した「新しき村」では、あらゆる困難と闘っても自己の内心の必要を貫こうとする人道主義の具現化を目指し、作家仲間や俳人、そして共鳴する文学青年や農村青年たちが、開拓という困難な労働に立ち向かいました。すぐに、インテリ中心の労働、劣悪な土地、自然災害の脅威などによりペースダウンしました・・・がしかし、それ以上に悪影響を及ぼしたのは村内での『生臭いエゴイズム』であったといえます。

つまり、献身的に働く人と昼間適当に働いて夜好き勝手なことをする人との差が、村を実篤が理想したものとはかけ離れた村にしたのです。一人の女性を巡って男たちの嫉妬や葛藤がすぐに始まり、多くの人が村を去りました。実篤自身も数年後村を去って作家生活に戻ったのです。

資本主義社会の「壁」とは？

大正デモクラシーの時代は、資本主義が日本で急発展する時代でした。それに抵抗しつつ、個人の内面自覚を促す文学活動を社会の中でどう具現化するかに悩んでいたのは実篤だけではありません。官僚だった父親から広大な農園を相続した有島武郎（ありしま・たけお）もその一人でした。

彼は、実篤の「新しき村」の失敗を予言しつつ、自らも失敗覚悟で農園を六九戸の小作人に無償で譲渡しました。この「有島共生農園」は、資本家たちの野望の中で瓦解していきますが、有島自身も精神的な壁にぶつかり、軽井沢で雑誌記者の女性と心中してしまいました。

「階級」を超えるものとは？

香港や台湾に行くと、彼らの旺盛な食生活と勤勉さ、そして節制した生活態度に感心します。また、家族や親類を大事にする気持ちもつよく伝わってきます。植民地化された過去をマイナスとして引きずらず、自分たちができることを精一杯やって生きているという印象をつよく受けます。

日本は他国から植民地化されたことはありませんが、明治維新であまりにも急激な欧米化をし、敗戦では自ら

を否定しつつ資本主義大国となったため、個人の内面的な成長が時代の変化についていけないうちに、大国として工業発展してしまった「負い目」をまだ引きずっているのかもしれませんが。今こそ日本には教育が最優先課題として必要な時代と言えないでしょうか。

取材/記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

武者小路実篤（1885～1976年）

明治43年に友人・志賀直哉らと雑誌『白樺』を創刊し、以後、60年余にわたって文学活動を続けた。小説「おめでたき人」「友情」「愛と死」「真理先生」、戯曲「その妹」「ある青年の夢」などの代表作、また多くの人生論を著したことで知られ、一貫して人生の賛美、人間愛を語り続けた。大正7年には「新しき村」を創設し、理想社会の実現に向けて、実践活動にも取り組む。

また、『白樺』では美術館建設を計画し、昭和11年の欧米旅行では各地の美術館を訪ねるなど、美術にも関心が深く、多く評論を著す。自らも40歳頃から絵筆をとり、人々に親しまれている独特の画風で、多くの作品を描いた。その生涯を通じて、文学はもとより、美術、演劇、思想と幅広い分野で活動し、語り尽くせぬ業績を残したといわれる。

武者小路実篤記念館 実篤の生涯より

新しき村

大正7年、実篤の理想に共鳴する十数名の同志らと共に、宮崎県児湯郡木城村大字石河内字城の荒れた土地に、労働にいそしみつつ、自己を磨きお互いを生かしあうための共同生活の場「新しき村」を建設。その後、ダム建設のために農地の大切な部分を失ったこともあり、埼玉県毛呂山町に主力が移りました。そして今日も営々と活動を続けている。実篤にとって「新しき村」の活動は、生涯をかけ、精魂こめた仕事であり、未来への熱い希望でした。

武者小路実篤記念館 実篤の活動より

大正時代の文化

国民の民主主義を求める運動である大正デモクラシーが盛んになったため、市民の文化が繁栄した。また一方で資本主義の発達により、社会問題が表面化し、文化に大きな影響を与えた。さらに、義務教育の就学率もようやく100%近くになり、学問や科学が一般の人々に広まり、近代科学が発達した。

文学ではまず、人道主義の立場から人間の幸福を追求した白樺派が登場した。志賀直哉・武者小路実篤・有島武郎ら。現実社会の知性に基づいて見極めようとする新潮派では、芥川龍之介・菊池寛らがいる。社会主義運動の高まるなかで労働者・農民の生活を扱ったプロレタリア文学では、小林多喜二・徳永直らがいた。

彫刻では高村光太郎が、演劇では小山内薫が築地小劇場を作り新劇の発展に尽くした。1925年には、都市部での近代化や電化が進み、ラジオ放送が開始された。